

仏教徒が躍動する“花の都”フィレンツェ

前回のベネチアから、14世紀にルネッサンスを開花させた“花の都”フィレンツェに入りました。高校時代に世界史や美術の時間によく聞いた歴史の舞台です。バスは高台にあるミケランジェロ広場に上がりました。アルノ川を挟んで前方にフィレンツェのほぼ全貌と、手前には旅行社の案内や絵葉書に必ず出ているドゥオモがあります。最高のパノラマです。広場にはミケランジェロのダビデ像が高くそびえ、その逞しさ、力強さがびんびん伝わってくるようでした。

ルネッサンス絵画の集大成ともいえるウッフィッツィ美術館では当時の芸術家たちの作品を鑑賞。レオナルド・ダ・ヴィンチの「受胎告知」、ラファエロの「ヒワの聖母」、ボッティチェッリの「ヴィーナスの誕生」等等、やはり心を圧倒する何かがあります。

ところで、イタリアの観光地はどこに行っても教会があり、またその中心となるドゥオモがあります。その素晴らしい建築や彫刻を見ると、宗教の力と芸術の関連性を改めて考えさせられるところです。そして時代を拓くのが宗教の力とすれば、このカトリックの総本山ともいうべきイタリアに近年、仏教徒が著しく増えていることが注目されます。イタリア創価学会のことです。日本の創価学会員でもある私は、フリータイムを利用して現地のSGI（創価学会インタナショナル）フィレンツェ文化会館を訪ねました。会館はメディチ家の時代から残る歴史的にも由緒ある館。現地の中心者によると、現在メンバー数は全土で数万、フィレンツェだけでも数千人になるといいます。その発展ぶりを象徴する三つもの場面に遭遇したのです。

まず、美術館でガイドを務めてくれた婦人が、なんとイタリア創価学会のメンバーであることが途中でわかったことです。美術館の見学を終えると少し彼女と懇談しました。実はその日の午後、私たちは創価学会イタリア文化会館を訪問する予定でしたが、会館の地図と住所を書いたコピーを朝ホテルに置き忘れてしまっていたのです。行き方を聞きかけたら、彼女いわく。

「OK、じゃあ私が一緒に行きましょう。実は私は毎月1回ボランティアで会館の清掃に行っています。ちょうど今日の午後は空いているから任務に当たることにするワ。わざわざではないから心配なさないでいいですよ」——なんとというありがたい申し出でしょうか。なるほど、彼女と一緒に乗ったバスはどの停車駅でもアナウンスがありませんでした。もし、初訪問の自分たちだけで行ったらとても無理だった。実にラッキーだったのです。

会館訪問を終えてゲートを出ようとするところで、恰幅のよい一人の壮年と行き会いました。案内をしてくれていた中心者が言いました。「彼はこれから牙城会（ボランティアで会館の管理と警備をするグループ）の任務に就くところです。それが終わると夜中の12時から7時までホテルのレセプションの仕事に就くと聞いています。ホテルはなんと皆さんが宿泊しているホテルですよ！」

そのホテルに戻る車の中で聞こえてきたラジオ番組。同行の中心者は言いました。「これはローマが発信局の英語放送。この番組の人気ディスクジョッキーもウチのメンバーなんですよ」。

旅行社が手配したフィレンツェの美術館見学やホテル予約です。偶然の重なりとはいえ仏教徒、すなわちイタリア創価学会メンバーの、純真な信仰姿勢と社会での活躍を目の当たりにする思いでした。

永遠の都でホットな思い出

午前 8 時にフィレンツェを出たバスは、シエナを観光で回り午後 2 時過ぎにローマに到着しました。一行はまずバチカン市国のサン・ピエトロ大聖堂を訪ね、続いて夕闇迫るスペイン階段へ、そして薄暮の中にライトアップされているトレヴィの泉へと足を運びました。

翌日は終日フリータイム。期待して朝起きると、なんと「♪イタリアはきょうも雨だった・・・」。少しでも雨を避けるためにと、最初にバチカン美術館に足を運びました。世界中から集められた美術作品の数々。圧巻はミケランジェロの「最後の審判」。新約聖書におけるこの世の終末を描いた傑作です。100 人以上入るこの大広間だけは写真撮影も声高な話も許されず、警備もとりわけ厳しかった。壮大な壁画と天井画のある静かな空間で、祭壇の壁中央に仰ぎ見る作品からは圧倒的な威厳と感動が伝わってきたものです。

雨が小降りになってきたところで、タクシーでフォロ・ロマーノとコロッセオの遺跡へ。霧雨に煙る廃墟には 2000 年余の歴史の息づかいが感じられます。それにしても円形競技場コロッセオの重厚さと威厳！一つが 10 トンをはるかに超えると思われる石が積み上げられ、円周 527 ㍎、高さ約 50 ㍎の競技場は 7 万 3000 人を収容した。猛獣と剣闘士あるいは剣闘士同士の戦いに市民は熱狂したといえます。

石造りの急な階段を登り(現在は観光客用にエレベーターも設置されています)、観客席の一番高い位置にある通路に立つ。円形の競技場全体が見下ろせます。私は折りたたみ傘をさしながら写真を撮っていました。観光客の列が流れ、よい撮影スポットにくると 10 人以上が 3 列ほどになり、順番に前に出ではシャッターを押しています。

私の番が来ました。カメラを濡らさないように左手に傘を持ち、右手にカメラを構えて撮影に入ろうとした矢先、後部からヒョイと傘の柄に手をかけ抱えてくれる人がいました。「どうも、どうも——」。私はてっきり同行の I 氏が後から支えてくれたものと思い、そのまま 5 カットほどシャッターを押しました。そして振り返りその場を辞そうとして「アッ」と驚きの声をあげたのです。

なんと傘を支えてくれていたのは、I 氏ではなく、にこやかに笑っているヒゲの豊かな初老の紳士でした。きれいな英語の発音と容貌から間違いなくイギリス人とわかりました。私はキチンとしたお礼の言葉と共にもう少し話し込みたい衝動に駆られましたが、同氏も仲間と一緒に写真を撮ろうとしていたこと、また混んでいたのが「サンキュー ベリーマッチ」の一言のみでその場を後にしたのでした。

ほんの小さな親切、また気遣いです。それでも国籍に関係なく、自然な形でサッと他の

人のサポートができることに、さすがジェントルマンを育ててきたイギリスの伝統、と感銘したものです。雨に濡れた冷たい古代遺跡で受けた外国人からの小さな親切。私の心も思わず温かく和んだのでした。

シニアの休日 *in Rome*

ところでイタリア訪問を前に私は再度、映画「ローマの休日」を鑑賞しました。1953年の製作。あれから半世紀あまり。DVDによる白黒の画面ながら、あの新鮮な感動と鑑賞後に残るほのぼのとした情感は変わっていません。アン王女を演ずるオードリー・ヘップバーンはあくまでキュートだし、新聞記者を演ずるグレゴリー・ペックもおおらかな人間愛がにじみ出ています。

その映画のロケ地をたどってみました。定年8年、初老男のイタリア初訪問。「シニアの休日 *in Rome*」です。

前日、バチカン宮殿を見学してスペイン階段に着いたときはすでに周囲は夕闇で覆われていました。でも階段は大にぎわい。外灯が記念写真を撮る人々の顔を照らしていました。アイスクリームを食べていた王女と新聞記者が再会した石段の付近では恋人たちの抱擁とキスが絶えません。

「ローマの休日ツアー」のミニバスはまず「真実の口」のある教会へ。入り口にある直径2メートルほどの円盤に海神トリトンの顔が刻まれ、大きな口が開いています。嘘つきは手を入れると抜けなくなる、との伝説があります。映画でも身分を隠しウソを言っている王女が、こわごわと手を入れ、引きずり込まれそうになるシーンが面白い。実は、円盤は古代ローマ時代のマンホールの蓋だったという。いつ、誰か知らないが、よくぞまあ、上手に伝説を創り上げたものですよ！

引き続き、映画に出てくるいくつもの場所を訪れました。パンテオン、フォロ・ロマーノ、王女が入ったレストラン、新聞記者が住んでいたアパートとマルグッタ通り。多くの世界的な芸術家たちが住んでいたという小さな通りは、雨に濡れて水色に光り、街路樹は鮮やかな秋の色を映していました。

映画は、おとぎの国の夢物語だけれど、ロマンがあり愛があります。王宮の籠の中の鳥が飛び出し自由な市民の生活を体験——儀式に迫られる王女の窮屈さが想像できるがゆえに、彼女の勇気ある行動に誰もが共感、護衛から逃げるときに応援さえしてあげたい気持ちになるでしょう。

一方、グレゴリー・ペックの演技も、抑えが効いていてすばらしい。賭けで借金、家賃さえ滞っていた。もしこの大スクープを記事にすれば、莫大なお金が転がり込み、記者としての評価も上がったかもしれない。でも、仕事やお金よりも最後の一线で王女を守ろうとしてすべてを捨てた。ときどき見せる渋い表情がこの映画の品格と情趣を保っています。

たった1日だけの出会いだったが、誰の目にも二人の間の愛が深まっていくのが見えた。王族に帰った王女の「もう戻らないことも出来たのです」との言葉の裏には「彼と一緒にあって」との思いまであっただろうことも推察できます。王女の髪をカットした床屋での

仕草やその後パーティでの再会、カメラマンのときにコミカルな演技・・・どれも上品な笑いとユーモアに満ちています。

安易なハッピーエンドとせず、記者とカメラマンの二人が信義をかけて王女を守った、というほろ苦い男の切なさ最後の記者会見の感動シーンが、なおさら鑑賞者の胸に消えない何かを残すのでしょう。そんな想いを回想しながらの、シニアの「ローマの休日」となったのです。